

高崎市文化財調査報告書第418集

中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会
有限会社橘地所
技研コンサル株式会社

高崎市文化財調査報告書第418集

中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会
有限会社橘地所
技研コンサル株式会社

例 言

1. 本書は宅地造成工事に伴う「中泉十王堂遺跡3」（市道跡調査番号742）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、有限会社橋地所の費用負担によって実施された。記して感謝の意を申し上げます。
3. 本調査および整理作業は高崎市教育委員会文化財保護課の指導のもと、技研コンサル株式会社が実施した。
4. 発掘調査および整理作業の体制は下記のとおりである。

遺跡所在地	群馬県高崎市中泉町字十王堂 99 番地 1
監理指導	高崎市教育委員会
調査担当	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 30 年 4 月 18 日～5 月 22 日
整理作業期間	平成 30 年 5 月 28 日～8 月 30 日
調査面積	18295 m ²
発掘調査参加者	曾根裕 秋山修 新井實 榎原義久 遠藤好則 加藤知恵子 鴨田榮作 北爪二郎 桑原襄 今野妙子 設楽和男 田部井美砂子 山口直子
整理作業参加者	大川明子 福島緑子 安藤三枝子 岡田萌 河本ちさと 杉田友香 田所順子 南雲富子 細野竹美

5. 本書の編集は中村が行い、執筆は I を矢島が、他を中村が行った。
6. 発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して高崎市教育委員会で保管されている。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたり下記の諸氏及び機関に有益御指導、御協力を賜った。記して謝意を表します（順不同、敬称略）

永井智教 西川制 能登健 日沖剛史 山本杏子 山下工業株式会社

凡 例

1. 全体図および遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅴ系を使用している。本文および図中では下三桁を表記している。
2. 挿図に国土地理院発行 1/25,000「前橋」「下室田」、高崎市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
3. 土層および遺物の色調は「新版標準土色帖」（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
4. 掲載図面の縮尺は、全体図は 1/120、遺構図は 1/60・1/80 とし、図中にスケールを示した。
5. 遺物実測図及び拓影図の縮尺は土器は 1/4、石器は 1/1 を基本とし、図中にスケールを示した。
6. 本文および表中の計測値については [] は現存値を、() は復元値を表す。
7. 遺物写真図版は 1/3 に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に () で示した。
8. 遺物実測図、遺構図のトーン表現は以下のとおりである。

構築面（基本層序 V 層以下）  須恵器断面 

9. 主な火山灰等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間 A 軽石：1783 年）、As-B（浅間 B 軽石：1108 年）、As-C（浅間 C 軽石：4 世紀初頭）、Hr-FA（榛名二ツ岳洗川テフラ：6 世紀初頭）

目次

例言・凡例		(3) 方形竪穴状遺構	11
I 調査に至る経緯	1	(4) 土坑	12
II 調査の方法と経過	1	(5) ビット	12
III 遺跡の立地と環境	2	(6) 倒木痕	15
1 地理的環境	2	(7) 遺構外出土遺物	16
2 歴史的環境	3		
IV 基本順序	6	VI 発掘調査の成果と課題	17
V 検出された遺構と遺物	7	1 古墳時代前～中期の畠と樹木	18
1 調査概要	7	2 古代の用水路	19
2 遺構・遺物	7		
(1) 溝	7	写真図版	
(2) 畠	11	報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第10図 1号土坑	14
第2図 周辺遺跡図	3	第11図 1～13号ビット	15
第3図 調査区全体図	5	第12図 1号倒木痕	15
第4図 基本順序とトレンチの位置	6	第13図 出土遺物	16
第5図 1・2・4・6号溝	9	第14図 1号畠の残存状態	17
第6図 3号溝	10	第15図 1号土坑と根系の相関関係	18
第7図 1・2号畠(調査区南部)	12	第16図 H ₂ F-A降下後における溝の変遷	19
第8図 1・2号畠(調査区北部)	13	第17図 3号溝の流路想定	20
第9図 1号方形竪穴状遺構	13		

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	4	第3表 周辺遺跡における畠の幅幅と植物残骸比較(古墳時代)	17
第2表 出土遺物観察表	16		

写真図版目次

PL.1 調査区全景 奥に榛名山(南東から) 調査区全景(北から)	PL.3 6号溝 完掘状況(北東から) 1・2号畠 完掘状況(北から) 1・2号畠 完掘状況(北西から) 1号土坑 完掘状況(北から) 1号方形竪穴状遺構 土層断面(北から) 1号方形竪穴状遺構 完掘状況(北西から) 7号ビット 土層断面(南から) 8号ビット 土層断面(東から)
PL.2 1号溝 完掘状況(東から) 2号溝 完掘状況(南東から) 3号溝 完掘状況(北東から) 3号溝掘削痕 完掘状況(北東から) 3号溝 土師器環(12図9) 出土状況(北東から) 3号溝 土師器環(12図15) 出土状況(北東から) 4号溝 完掘状況(東から) 5号溝 完掘状況(東から)	PL.4 13号ビット 検出状況(東から) 発掘調査風景(北東から) 出土遺物

I 調査に至る経緯

平成30年3月、土地所有者染谷薫氏と工事施工業者有限会社橋地所から、高崎市中央町において計画している宅地分譲用地的開発に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中泉十王堂遺跡に隣接し、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年2月19日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年3月7日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代の畠跡等の遺構が検出され、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「中泉十王堂遺跡3」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成30年4月18日に有限会社橋地所と民間調査機関技研コンサル株式会社との間で契約を締結、また同日に有限会社橋地所・技研コンサル株式会社・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

II 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、試掘調査の結果に基づき、道路部分を対象に行った。調査面積は182.95㎡である。座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅱ系を使用している。

発掘調査は、平成30年4月18日から開始し、初日は重機搬入路の確認や近隣住民への挨拶回りを行った。19～24日にかけて、測量基準点の設置や調査区の設定などの準備を行い、雨天を挟んで26日に表土除去を行った。表土除去は0.25㎡級バックホウを使用し、調査区の北側から南側へと順次展開した。表土除去はまず、バックホウでAsC混入黒色土層に相当する基本層序Ⅳ層まで行き遺構確認に努めたが、Ⅳ層の堆積はまだらで、Ⅱ層土の耕作痕による攪乱が著しく、また周辺遺跡の調査記録からⅣ層土を覆土とする畠の存在が予想されたことから、人力でⅣ層土を5～10cm程度一律に掘り下げ、最終的に淡色黒ボク土との漸移層であるⅤ層上面を遺構確認面とした。27日には遺構確認を終え、28日から遺構調査を開始した。基本的には、遺構掘り下げ→セクション図化・写真→遺物出土状況図化・写真→完掘状況写真の手順で調査を行った。5月14日には全景写真撮影を行い、15日には終了確認が市教委により行われた。終了確認後、確認面としたⅤ層以下の遺構と遺物の有無を確認するため、調査区中央に2本のトレンチを設定し、総社砂層の漸移層に相当するⅦ層まで掘り下げたが遺構は確認できなかった。また、総社砂層に相当するⅧ層以下の基本層序を確認するため、調査区中央に1.5m四方の深掘りを行った。18日にはトレンチ調査を終了し、21～22日にかけて機材の搬出を行い、現地調査を終了した。測量は、電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行い、オルソフォトによる写真測量も併用した。遺構写真の記録には、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/PRESTO・ISO400/PROVIA・ISO400）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・EFS18-135mm）を用いた。

整理作業は平成30年5月28日から開始した。土器の実測における断面形の計測と外面調整の描画には3Dスキャナ型三次元測定機（KEYENCE VL300series）を活用した。なお土器の断面形に関して本書では、器壁の荒れがひどく器形の特徴を捉え切れなかった1点の土器を除き、観察による点検を経た上でほぼそのままにスキャナのデジタルデータを掲載している。遺物写真の記録にはデジタルカメラ（CanonEOS 5D・EF200mmL）を用いた。遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に際してはDTPの手法を用いた。8月30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

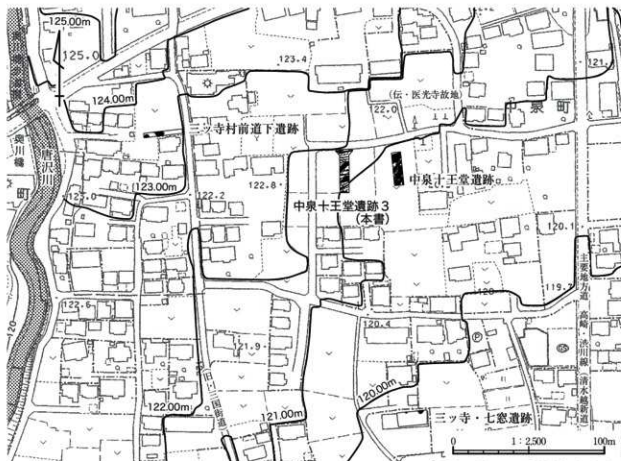
Ⅲ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

中泉十王堂遺跡3は、高崎市中泉町字十王堂99番地1に所在する。2006年に高崎市へ編入する以前は群馬郡群馬町に属していた。遺跡の150m東には、高崎と渋川の市街地を結ぶ主要地方道である高崎・渋川線（県道25号線）が南北に直通する。その道端には古くから小売店が軒を連ね、町並みが大型店舗やチェーン店に移り変わった今も活況を呈する。ゆえに遺跡周辺は市街化しているが、大通りを一歩裏へ入ると、そこには宅地と畑地が閑静な景観を留める。ごく最近、前橋と富岡を結ぶ予定の西毛広域幹線道路がこの大通りに接続し、これまでの南北の往来に加えて東西の利便性も増し、宅地や畑地の一角には、再び新興の住宅地が増えつつある。

本遺跡は、榛名山の山麓扇状地である相馬ヶ原扇状地の扇端部に立地する。相馬ヶ原扇状地の形成は、約1.7万年前に榛名山の山崩れで生じた障場岩屑なだれを契機に始まる。その扇頂部に端を発して表層を流れる唐沢川や柴谷川などの中小河川は、形成の過程で何度も大規模な洪水を起こし、地表を削り、谷を埋め、流れを変えては再び侵食と堆積を繰り返すことによって、縄文時代前期頃までには総社砂層と呼ばれる硬質の砂層を帯びて厚く堆積させ（早田1990）、その厚さは本遺跡でも22m以上に達する。これらの中小河川は、その後の歴史時代でも、榛名山や浅間山の噴火による火山灰や軽石などテフラ（火山砕屑物）の堆積を契機に氾濫し、帯に泥流や土石流を起こして、それぞれの時代に生きた人々の営為を翻弄してきたのだが、一方でこれらの堆積物は、遺跡として残りにくい田畠の痕跡までもを地表下に留め、昔の人々の生業を現在の我々に垣間見せてくれる。

また、このような暴れ川であった唐沢川や柴谷川、扇尖部を水源とする天王川に加えて、「井出」「中泉」「水窪」「冷水」などの地名に残る扇端部湧水点の水利に頼らざるをえないこの土地は、潜在的な貧水地帯であり、このことは本遺跡の形成にも少なからぬ影響を与えていると考えることができる。



第1図 調査区位置図

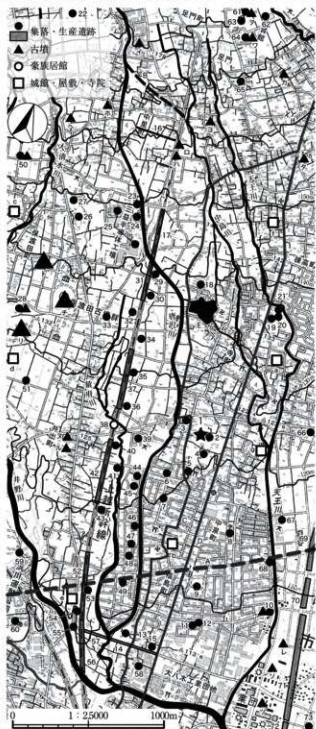
2 歴史的環境

本遺跡は、唐沢川と天王川に隔たれた南北に細長い微高地に立地する。唐沢川より西は、本遺跡周辺と対照的な水田地帯であり、大型前方後円墳である保渡田古墳群（トーリ）や豪族居館の三ツ寺Ⅰ遺跡（38）に、ある段階の結実をみる水利社会の展開過程には、若狭徹氏をはじめ（若狭 2007 など）厚い研究史がある。また天王川より東は、本遺跡周辺に似た貧水地帯だが、奈良時代に上野国府や国分寺の隣接地域になることで、当地とは異なる地域史的展開がみえる。そこで本節では、この唐沢川と天王川で画される小地域の遺跡を概観する。

先述のように、縄文時代前期頃まで扇状地の堆積作用が強く影響した本遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は、わずかな遺物の出土を除いて、ほとんど確認されていない。縄文時代前期以降も扇状地は不安定な環境だったのか、権原Ⅱ遺跡（7）などで中期の小規模な集落が調査された程度である。本遺跡や三ツ寺・七窓遺跡（4）には倒木痕があり、転倒時に巨大な根鉢を形成するブナ類やカヌ類のような、浅根集中型の根系をもつ大木（岡住 1979）が林立していたのかもしれない。

弥生時代中期後半になると、南部の兩窓遺跡（14）や大八木・伊勢廻遺跡Ⅱ（15）に遺跡が分布し、後期に続く。扇端部湧水を水源とする猿府川下流域の両岸では、西浦北遺跡、兩窓遺跡、大八木熊野堂遺跡とその周辺（14・15・47～49・52・53・56・57）で、後期の住居跡と水田と方形周溝墓が一体的に分布し、湧水の小さな谷を農業基盤とした営みが見える。同じ傾向は天王川下流域の諸口遺跡（10）や小八木志志貝戸遺跡（71）にもいえる。

古墳時代前期になると、猿府川下流域の遺跡は南端に集約し、大八木熊野堂Ⅱ遺跡（56）に前方後方形周溝墓を造営するが中期に継続せず、天王川下流域でも同様である。該期はAs-Cの火山災害に直面しており、その事態が遺跡の分布を変化させる一要因となった可能性はある。本遺跡1号冢や中泉十王堂遺跡（2）の住居跡群は該期の終わりに営まれ、災害は収束していただろうが、やはり現状では中期に継続しない。該期の遺跡は保渡田Ⅶ遺跡（28）など唐沢川以西の小地域に多く、やがて保渡田古墳群や三ツ寺Ⅰ遺跡が中期後半に成立する。その農業基盤として、本来は中島川を介して天王川へ流れた唐沢川（B）を、現在の流路へ付け替えた可能性が保渡田遺跡（17）や保渡田東遺跡（25）の調査や旧地形のボーリング調査から指摘されている（能登 1990）。中道遺跡（16）のボーリング調査では該当する旧地形は確認されないが、仮に付け替えを推定すると、本遺跡の小地域が南北に細長い貧水地帯として認識できる背景には、人為的な要因が深く影響する可能性もある。このような経過もあってか



第2図 周辺遺跡図

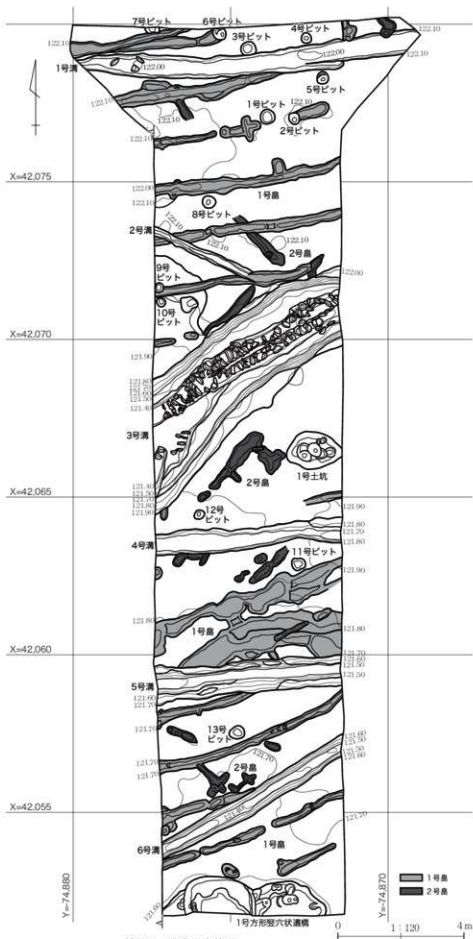
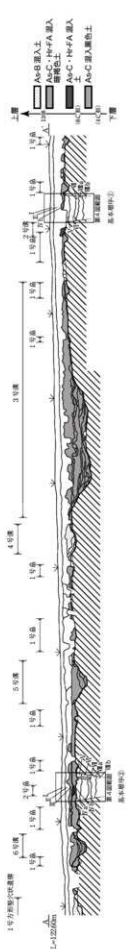
中期の遺跡は少なく、権現原Ⅰ遺跡（6）や大八木箱田池遺跡（11）に小規模な集落が確認できる程度である。一方、三ツ寺大下遺跡（44・45）や井出村東遺跡（42）など、猿府川中流域両岸に集落が増え、この現象は、湧水から唐沢川を介した河川灌漑へと更新された猿府川の、新たな用水網を基盤とする可能性もある。中期の終わりに今度は Hr-Fa の火山災害に直面し、保渡田古墳群周辺の水田地帯は泥流による大きな被害を被る。以後、大型前方後円墳は造られないが、中林遺跡（39）や三ツ寺Ⅲ遺跡（31）など集落は継続し、その復興は早い。本遺跡の小地域はより高燥で泥流の影響は少ないのか、遺跡の分布は細々と続き、前代より標高が高い中島川の開析谷に面する一帯に、堤上遺跡（18）や棟高南八幡街道遺跡（19）や保渡田遺跡が新たに営まれる。これらは平安時代まで継続し、中でも花形香葉が出土した堤上遺跡は、この小地域で質量共に卓越した規模にある。7世紀になると、さらに標高の高い地帯に足門西古墳群（イ）や毘沙門古墳群（ロ・ハ）などの群集墳が造営される。

中島川の開析谷に面する遺跡は、奈良～平安時代に規模を広げ、棟高南八幡街道遺跡3（21）には大型の住居跡や掘立柱建物跡が建つ。また、堤上遺跡では帯金具や八咫鏡や中空円面鏡などが出土し、前代に続きこの小地域で卓越した内容をもつ。これら拠点的な遺跡群の南方で扇状地の下方にある、本遺跡3号溝や三ツ寺村前下遺跡（3）2号溝は該期の用水路と判断でき、微高地を南に流れる。その先の低地部では、中泉遺跡（8）や福島遺跡（9）に水田跡が分布するが、1108年に今度は As-B の火山災害で埋没する。そのような影響もあつてか、堤上遺跡を中心とした遺跡群はその後に継続しない。また、本遺跡の溝跡は、平安時代後期頃に掘削方向が東西に統一され、この頃、土地区画に変更があつた可能性がある。なお、江戸時代に整備された三国街道（C）は本遺跡の西側を南北に通過するが、南方の両壱遺跡ではその路線脇で As-B 以前の道路状遺構が調査されており、この小地域の南端部を東西に走る推定東山道国府ルート（A）との関連が問われる。

宝徳2年（1450年）には、本遺跡北側に医光寺の創建が伝わるが、戦国期に混乱を避け、現在の寺地（g）へ集落ごと移転したと言われており、本遺跡でこれに関連する遺構や遺物は確認できなかった。慶安2年（1649年）、高崎藩主安藤重長は、中島川の開析谷に唐沢川と中島川から引水し、三ツ寺・棟高・中泉の用水溜井として三ツ寺堤（E）を築いた。しかしその後も当地は貧水地帯であり、周辺の村々を巻き込んだ唐沢川や三ツ寺堤の用水権をめぐる水争いは、近代にいたるまで幾度となく生じている。

第1表 周辺遺跡一覧表

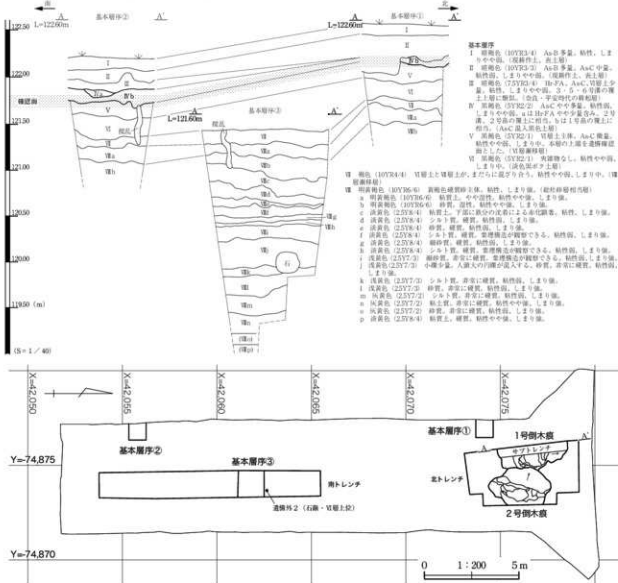
番号	遺跡名	所在地	時代	遺跡種類・説明
1	中泉Ⅰ古墳遺跡3	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
2	中泉Ⅱ古墳遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
3	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
4	三ツ寺Ⅰ集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
5	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
6	権現原Ⅰ遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
7	中泉遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
8	中泉遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
9	福島遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
10	福島遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
11	大八木箱田池遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
12	大八木山田池遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
13	保渡田山腰集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
14	保渡田山腰集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
15	保渡田山腰集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
16	中泉遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
17	棟高Ⅰ遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
18	堤上遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
19	棟高南八幡街道遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
20	棟高南八幡街道遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
21	棟高南八幡街道遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
22	棟高南八幡街道遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
23	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
24	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
25	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
26	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
27	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
28	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
29	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
30	中泉集落跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
31	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
32	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
33	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
34	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
35	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
36	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
37	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
38	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
39	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
40	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
41	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
42	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
43	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
44	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
45	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
46	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
47	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
48	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
49	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳
50	三ツ寺大下遺跡	高島 郡 1 邑、権現原一帯、白土池	古墳	古墳



第3図 調査区全体図

IV 基本層序

基本層序は、調査区西壁の北部と南部、調査区中央の3地点で観察した(4図)。Ⅲ層はAs-Bを含まず、以下の層序の粒子やブロックが攪拌された状態で含まれ、古代の溝の覆土層に類似することから、古代の耕起層と判断できる。表土層のⅠ・Ⅱ層による削平を免れた調査区南部で部分的に分布する。Ⅳb層はいわゆる「C黒」と通称されるAsC混入黒色土層で、ほぼ全域に分布する。直下で確認できる1号畝は、この土を畝間溝の覆土とし、「C黒」との分離は困難である。また、古墳時代後期以降の調査は通常この層位を遺構確認面とするが、今回の調査では隣接地点の調査成果からⅣ層を覆土とする遺構の存在が予測されたため、この直下でⅥ層との漸移層であるⅤ層上面を遺構確認面とした。遺構確認面の傾斜は南へ緩やかに下る。Ⅵ層は淡色黒が粘土に相当すると判断できる。ごく少量の縄文土器片や石器を包含する。Ⅶ層はⅧ層への漸移層で、下位は黄褐色砂質土を多く含む黄色味を増す。古墳時代以前の遺構の有無を確認するために掘削した南北2本のトレンチは、この層位を遺構確認面とした。Ⅷ層は黄褐色の硬質な砂質土で、結實・シルト質・砂質の細分層が互層を成し、層によっては葉理構造が発達したり、人頭大の円礫が混入する。堆積が厚く、以下の層序は確認できなかったが、周辺遺跡での地質の分析から、この層は総社砂層に相当すると判断できる。表土下3.0mに達するⅧp層で、土中の湿気が滲み出す程度のわずかな湧水を確認した。



第4図 基本層序とトレンチの位置

V 検出された遺構と遺物

1 調査概要

中泉十王堂遺跡3（以下、「本遺跡」）は、中泉十王堂遺跡（以下、「一次調査」）の西側約30mに隣接する。これら2つの調査地点は同一遺跡の別地点と判断でき、各時代の溝やAsC混入黒色土を畝間溝の覆土とする畝は、連続性をもって分布している。しかし一方で、一次調査で確認された古墳時代前期の堅穴住居跡群は分布していない。

本遺跡では、弥生時代以前の倒木痕2箇所、古墳時代の溝2条、畝2箇所、土坑1基、ピット13基、飛鳥～平安時代の溝2条、方形堅穴状遺構1基、中世以降の溝2条を調査した。遺物は、3号溝から土師器や須恵器がある程度まとまって出土したが、分布する遺構の性格もあってか全体的に希薄で細片が多く、出土量は遺物収納箱に2箱程度である。しかしながら、現地表では比較的多くの土器片が表採できることを考えると、現代の耕作によって深度の浅い遺構は埋滅している可能性もあるだろう。

2 遺構・遺物

(1) 溝

1号溝（第5図、PL. 2） 位置 調査区北端部。（X = 42.079、Y = - 74.869 ~ - 74.880） 重複 1・2号畝、3号ピットより新しい。 走向方位 N - 86° - E。 規模 検出長 [11.02] m、上幅 0.35 ~ 0.75 m、下幅 0.18 ~ 0.54 m、深さ 0.10 m。底面の標高は東端で122.02 m、西端で122.05 m。 形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土はAs-Bを含む。 出土遺物 覆土中から土師器坏やS字状口縁台付甕、縄文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。 時期 堆積状況から中世以降と考える。

2号溝（第5図、PL. 2） 位置 調査区北部。（X = 42.072 ~ 42.074、Y = - 74.874 ~ - 74.877） 重複 1号畝より新しい。 走向方位 N - 66° - W。 規模 検出長 [3.64] m、上幅 0.21 ~ 0.35 m、下幅 0.05 ~ 0.19 m、深さ 0.13 m。底面の標高は北西端で122.02 m、南東端で121.97 m。 形状等 北西～南東方向へ直線的に走向し、北西端は調査区外、南東端は徐々に浅くなり消失。断面は弧状。底面は南東端に向かってわずかに傾斜する。覆土はHr-FAやAs-Cを含む。 出土遺物 なし。 時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

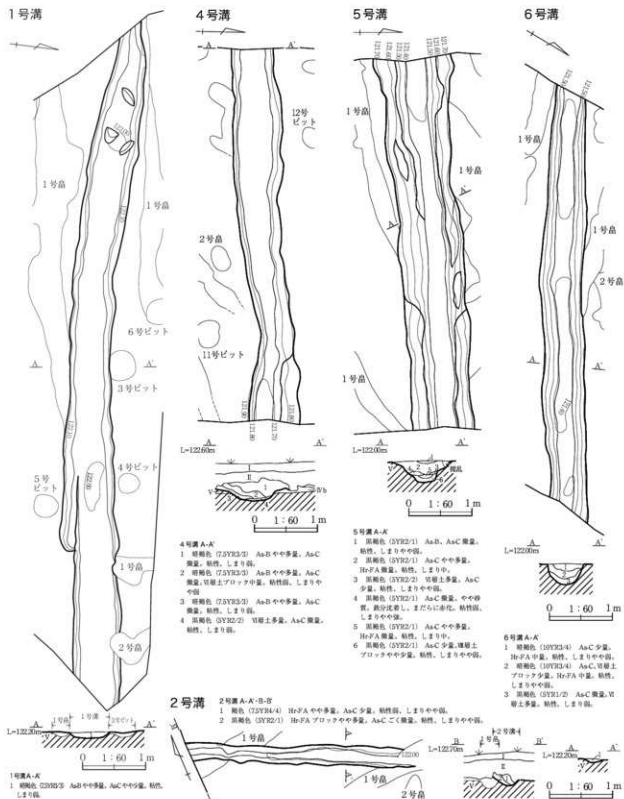
備考 覆土は2号畝に類似するが、走向方向と断面形状が異なるため、溝と判断した。

3号溝（第6・13図、PL. 2・4） 位置 調査区中央部。（X = 42.064 ~ 42.072、Y = - 74.871 ~ - 74.877） 重複 1・2号畝、9・10号ピットより新しい。 走向方位 N - 52° - E。 規模 検出長 [9.53] m、上幅 2.36 ~ 2.77 m、中段幅 2.23 ~ 2.36 m、下幅 0.26 ~ 0.34 m（旧段階）・0.22 ~ 0.35 m（新段階）、深さ 0.72 m（旧段階）・0.65 m（新段階）。底面の標高は北東端で121.35 m、南西端で121.23 m。 形状等 東から南西に向かって緩やかに曲がりながら走向し、両端は調査区外、断面は不整形なU字状。底面は南西端に向かってわずかに傾斜する。土層断面と底面の掘削痕列2条から再掘削を伴うと判断でき、新旧2段階に大別できる。旧段階は断面A-A'の19～28層、B-B'の18～28層が相当し、南壁際に沿って走向する。底面には規則的な掘削痕列が残るが、地点によっては、VI層とVII層が粗く攪拌されて反転したかのような地山の土塊が、耕作痕の覆土となっており（B-B'の28層）、これは掘削時の残土が完全に排土されずに取り残されたためと判断できる。掘削痕列は南西部の調査区西壁際付近ではあまり観察できず、この部分は底面の形状が不規則に乱れている。旧段階の覆土はHr-FAやAs-Cを含みAs-Bは含まない。下層には砂の堆積が観察できた（A-A'の28層、B-B'の27層）。また、壁面の崩落と判断できる地山ブロック土の流入層が、南壁際に顕著に観察できた。以上の点から、旧段階の溝は流水による侵食と埋堆を受けていると判断できる。ただし、底面の傾斜度や掘削

痕の残存状態、堆砂層の状態から、流勢はさほど強くなかっただろう。新段階は、断面 A-A' の 1～18 層、B-B' の 5～17 層が相当し、旧段階の北側に重複して再掘削されている。掘削痕や覆土の状態は旧段階と同じで、緩やかな水の流れがあったと判断できるが、堆砂層は下層以外にも 2 面観察でき、数度の流水の影響を受けながら徐々に埋没したものと判断できる。また、北壁西寄りの上端はテラス状に浅く窪み、覆土は溝の上層と連続するが (B-B' の 6 層)、底面に硬化面などは観察できなかった。なお、最上層には B-B' の 2～4 層がブロック状に乱れて堆積しており、埋没がほぼ完了して窪地化した本跡の底面を耕起した痕跡と判断できる。出土遺物 溝跡としては多くの遺物が出土した。底面直上～下層と上層からの出土量が多く、細片が多い程度形を残す遺物も少量含む。S 字状口縁台付甕や内斜口縁坏など、古墳時代前～中期の土器片を少量含むが、これらは細片で出土層位もまちまちであり、周囲に分布する遺構群からの流入と判断できる。量的な主体は、底面直上～下層では、いわゆる「北武蔵系」の範疇にある、小径化と稜部の退化が顕著でないいわゆる「鬼高式」の模倣坏と、丸底で口縁部が稜をもたずに内屈するいわゆる「真間式」の坏にあり、上層では平底気味で口縁部の外傾が強くやや扁平な在産暗文坏、口径底径比が大きく高台が高い須臾器高台付坏にある。また全体的な器種組成に偏りがあり、供膳具が多く煮炊具が極めて少ない点は特徴といえる。第 13 図には、本跡に特徴的な遺物と残存率の高い遺物を図示した。12～16 は旧段階の底面直上から出土した。12 の高台付坏は口径底径比が小さく、低い高台が底部外縁の内側に貼付されている。13・14 はいわゆる「真間式」の坏で、13 は体部外面のヘラケズリが口縁部直下までおよび口縁部が鋭く内屈し古相を示すのに対して、14 は体部外面の上端に最終調整が施されず口縁部は緩く内屈し、本跡出土の同系統の坏では新相を示す。15・16 は模倣坏で、小径化と稜部の退化が顕著で同系統の坏では終末的な形態を示す。7・9 は旧段階の下層から出土した。7 は盤で口縁部と底部の境に稜をもつ。9 は体部外面の無調整範囲こそ限定的だが 14 と同型式と判断できる。8・10 は新段階の下層から出土した。8 は大型の甕で外面に焼成前のヘラ記号らしき線刻が観察できるが判然としない。完全な還元雰囲気では焼成されておらず表面は橙色を呈する。10 は 15・16 と同型式と判断できる。5・6・11 は中～下層で出土したが緻密な層位は記録していない。5 の坏蓋は小径化と稜の退化が顕著で陶器 TK217 型式の古段階に相当する。6 は 12 と同型式と判断できる。11 の有段口縁坏は有段部がわずかな沈線のみで表現されており、同系統の坏では終末的な形態を示す。1～4 は上層から出土した。1 の坏蓋は環状柄をもつ。2 の高台付坏ないし塊は口径底径比が大きく体部は直線的に外傾し、底部外縁に断面三角状のやや高い高台が貼付されている。3 は大型の在産暗文坏で体部は大きく外傾し体部と底部の屈曲点は不明瞭であり同系統の坏では新相を示す。4 の皿は丸底で口縁部と体部の境は不明瞭である。旧段階の底面直上～新段階の下層出土の遺物には組列上の連続性を認めることができるが、上層出土の遺物には若干の断続があるだろう。時期 堆積状況と出土遺物の層位・形態から飛鳥～平安時代、おおむね 7 世紀中葉～9 世紀後半の時間幅が推定でき、7 世紀後半～8 世紀初頭に機能のピークを推定できる。備考 底面の掘削痕と堆砂層の状態から用水路としての性格が推測できる。

4号溝 (第5図, PL. 2) 位置 調査区中央部。(X = 42.064, Y = - 74.871 ~ - 74.877) 重複 2号高より新しい。走向方位 N - 86° - W。規模 検出長 [6.03] m、上幅 0.54 ~ 0.76 m、下幅 0.13 ~ 0.52 m、深さ 0.28 m。底面の標高は東端で 121.69 m、西端で 121.79 m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土は As-B を含む。出土遺物 覆土中から土師器坏や甕、黒色土器塊、縄文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

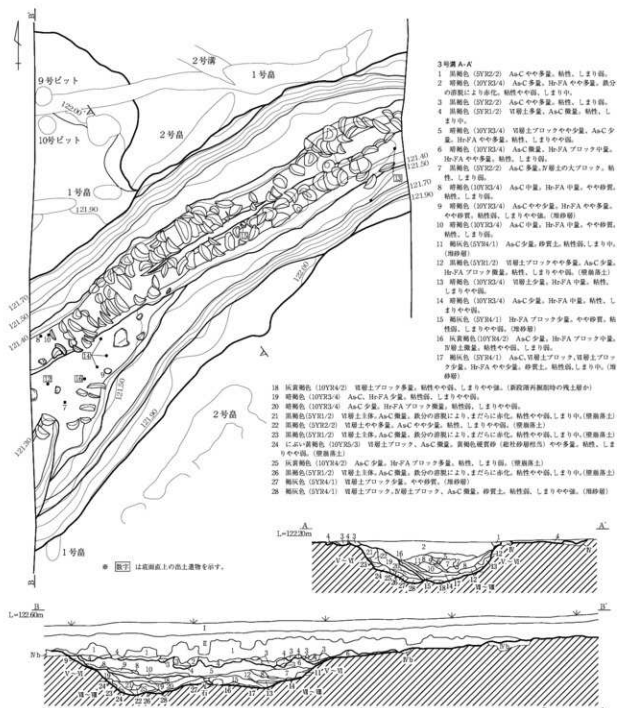
5号溝 (第5図, PL. 2) 位置 調査区南部。(X = 42.059, Y = - 74.871 ~ - 74.877) 重複 1号高より新しい。走向方位 N - 86° - E。規模 検出長 [6.01] m、上幅 0.91 ~ 1.26 m、下幅 0.21 ~ 0.30 m、深さ 0.48 m。底面の標高は東端で 121.38 m、西端で 121.42 m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は逆合形状。底面はほぼ平坦。覆土は最上層に As-B を含む。以下の層には Hr-FA と As-C を含



第5図 1・2・4～6号溝

み As-B は含まない。出土遺物 覆土中から土師器と須恵器の坏や甕、縄文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から平安時代後期と考える。

6号溝 (第5図, PL. 3) 位置 調査区南部。(X = 42.053 ~ 42.058, Y = -74.871 ~ -74.877) 重複 1・2号溝より新しい。走向方位 N - 59° - E。規模 検出長 [6.96] m、上幅 0.46 ~ 1.26 m、下幅 0.18 ~ 0.28 m、深さ 0.46 m。底面の標高は東端で 121.39 m、西端で 121.37 m。形状等 北東から南西方向へ直線の



第6図 3号溝

に走向し、両端は調査区外。断面は逆台形字状。底面はほぼ平坦。覆土はHr-FAとAs-Cを含みAs-Bは含まない。**出土遺物** 覆土中から土師器の甕が1片が出土したが、小片で時期不明のため図示しなかった。時期 堆積状況から古墳時代後期～平安時代と考える。備考 本跡を北東へ直線的に延長すると、一次調査1号溝へ繋がり、これらは同一の溝と判断できる。1次調査1号溝の覆土中からは須恵器有蓋高坏の坏部片が出土しており、坏部の形態は陶邑TK209型式に相当することから、6世紀末～7世紀初頭を若干前後する時期と判断できる。

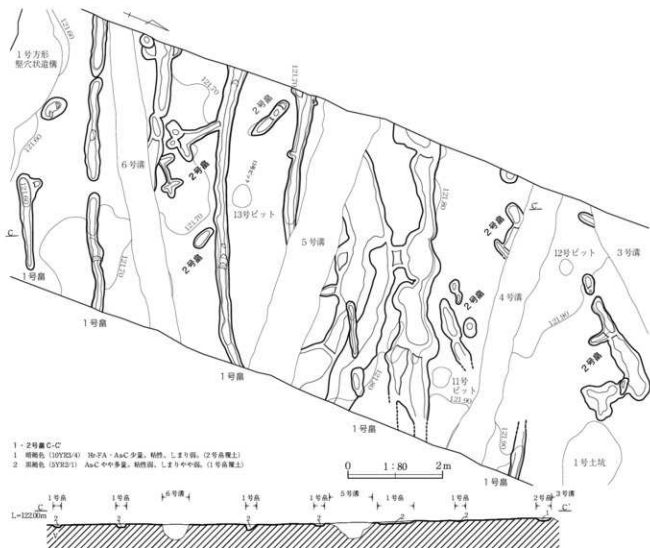
(2) 畝

1号畝 (第7・8・13図、PL. 3・4) 位置 調査区全域 (X = 42.053 ~ 42.080, Y = - 74.869 ~ - 74.880)。重複 2・7号ピットより新しく、1～3・5・6号溝、2号畝、9号ピットより古い。6号ピットとの前後関係は不明。主軸方位 N - 84° - E (調査区北部)、N - 68° - E (調査区南部)。規模 畝間溝の間隔は、1.46 ~ 1.68 m、深さは0.24 ~ 0.26 m。形状等 15条の浅い畝間溝が確認できる。畝幅は広く、畝間溝の断面は弧状。IV層土を畝間溝の覆土にもつ一定間隔で平行する小溝群を一括したが、調査区北部と南部では耕作方向が若干異なり、微地形的・身体感覚的な実情に則して耕作方向が無意識的に規制されていると判断できる。地点によっては東西の畝間溝にはほぼ直交する、南北の畝間溝と判断できるわずかな張り出しが観察できる。3・4号溝の間では畝間溝が大きく乱れて浅い不整形の窪地状を呈しており、これは部分的な耕作頻度の高さに起因すると判断できる。覆土 As-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。Hr-FA・As-Bは含まない。出土遺物 畝間溝の覆土中から土師器の壺・甕・壺の小片が少量出土した。Iは畝間溝の底面から出土した。球胴壺の底部だが小片のため詳細は不明である。時期 堆積状況と出土遺物から古墳時代前～中期と考える。備考 畝間溝に同質の覆土をもつ畝は一次調査でも確認されている。1次調査の畝は、耕作方向こそ本跡に類似するが畝幅は狭く、東西と南北の畝替えの痕跡は明瞭であり、栽培植物が耕作方法・頻度もしくはその両方に差異があると推測できる。

2号畝 (第7・8図、PL. 3) 位置 調査区全域 (X = 42.053 ~ 42.080, Y = - 74.869 ~ - 74.880)。重複 1号畝より新しく、1・3・4号溝より古い。主軸方位 N - 44° - E。規模 残存状態が悪く不明瞭だが、畝間溝の間隔は0.56 ~ 0.66 m、深さは0.06 ~ 0.08 m。形状等 9 ~ 10条のごく浅い畝間溝が確認できる。畝幅は狭く、畝間溝の断面は弧状。北東から南西の畝間溝と、これにはほぼ直交する北西から南東の畝間溝が、断続的だが格子状に観察でき、少なくとも2回以上の畝替えを推定できる。覆土 Hr-FAとAs-Cを含み、As-Bは含まない。出土遺物 畝間溝の覆土中から土師器の甕が少量出土したが、細片のため図示しなかった。時期 堆積状況と重複関係から古墳時代後期と考える。

(3) 方形竅穴状遺構

1号方形竅穴状遺構 (第9図、PL. 3) 位置 調査区南端部 (X = 42.051 ~ 42.053, Y = - 74.872 ~ - 74.877)。規模 竅穴部は東西2.26 m × 南北1.123 m、深さ0.97 m。テラス部を含めると東西5.16 m。形状等 南部が調査区外のため詳細は不明だが、竅穴部の平面形は隅丸方形、断面形は箱状。VII層を深く掘り込む。東西の上端は浅くテラス状に窪むが、底面に硬化面などは観察できなかった。竅穴部の底面にも硬化面などは観察できなかった。覆土 17層以下の中～最下層はAs-Bを含まず、VI層土の粗いブロック主体の黒褐色土層と、VII層土の粗いブロック主体の黄褐色土層が互層を成しており、埋戻しと判断できる。上層の1～12層はAs-Bを多く含み、埋戻し後の窪地に堆積した層群と判断できる。出土遺物 上層から土師器の坏・甕、陶器の火鉢が少量出土したが、細片のため図示しなかった。時期 堆積状況から平安時代後期と考える。備考 中層以下の堆積や底面の状態から、掘削後短期間で埋め戻されたと判断でき、VII層土の探掘を目的とした探掘坑の可能性はある。



第7図 1・2号墓(調査区南部)

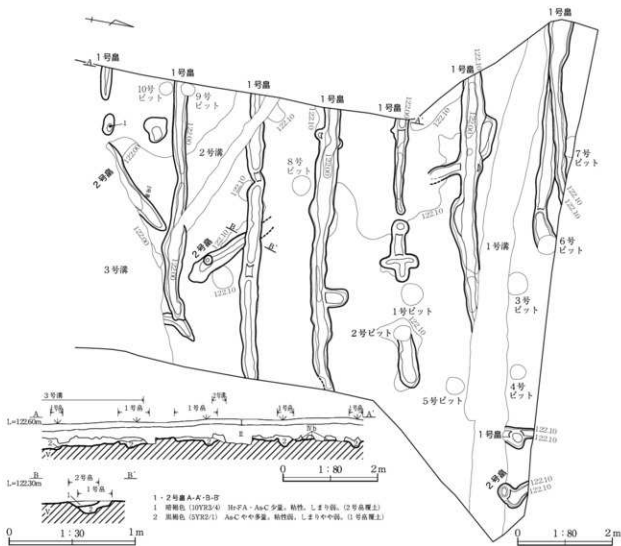
(4) 土坑

1号土坑 (第10図, PL. 3) 位置 調査区中央部 (X = 42.067, Y = - 74.872)。規模 東西 [1.75] m × 南北 1.18 m、深さ 0.74 m。形状等 平面形は不整楕円形、断面形は不整形。底面には不規則なビット状の小穴が6箇所観察できる。中央部の小穴が最も深く大きく、底面からの深さは0.56 mに達する。覆土 上層はAs-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。中層以下は上層よりもAs-Cの混入量が少ない。Hr-FA・As-Bは含まない。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。備考 形状から、根株の直下に直線的な深根の主根をもつ、立ち枯れた樹木痕跡と判断できる。

(5) ビット (第11図, PL. 3・4)

1号ビット 位置 調査区北部 (X = 42.077, Y = - 74.873)。規模 東西 0.45 m × 南北 [0.47] m、深さ 0.08 m。形状 平面形は円形、断面形は浅い弧状。覆土 上層には柱状に直径2～8 mm前後の発泡の良い軽石が純層で観察でき、粒径や色調・発泡の程度からAs-Cと判断できる(1層)。ただし、下層にはAs-Cを少量含む黒色土の堆積が観察でき、層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 層序の反転から、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

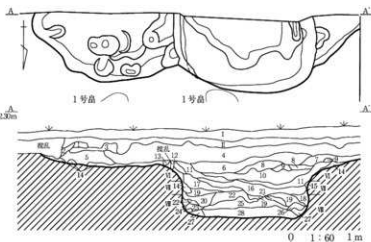
2号ビット 位置 調査区北部 (X = 42.077, Y = - 74.872)。規模 東西 0.29 m × 南北 0.36 m、深さ 0.10 m。形状 平面形は不整円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ビットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ビット



第8図 1・2号墓 (調査区北部)

1号方形竪穴遺構 A-A'

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 埴土上層, AaB多量, 粘性, しまり弱。
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 埴土下層, AaB多量, 埴土プロット少量, 粘性, しまり弱。
- 3 黒褐色 (10YR3/2) AaBやや多量, AaC微量, 粘性, しまり弱。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) AaBやや多量, 埴土, AaC少量, 粘性, しまり弱。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) AaBやや多量, AaC微量, 粘性, しまり弱。
- 6 黒褐色 (10YR3/2) AaB中量, AaC少量, 埴土微量, 粘性, しまり弱。
- 7 黒褐色 (10YR3/2) AaBやや多量, AaC中量, 埴土少量, 粘性, しまり弱。
- 8 黒褐色 (10YR3/2) AaBやや少量, AaC少量, 埴土中量, 粘性弱, L=122.30m, しまりやや弱。
- 9 黒褐色 (10YR2/2) 埴土プロット上層, 粘性, しまり弱。
- 10 黒褐色 (10YR2/1) 埴土多量, AaC微量, 粘性, しまりやや弱。
- 11 黒褐色 (10YR2/4) AaB中量, AaC微量, 埴土多量, 粘性, しまりやや弱。
- 12 黒褐色 (10YR2/1) AaB中量, 埴土プロット少量, 埴土やや多量, 粘性, しまりやや弱。
- 13 黒褐色 (10YR2/2) 埴土プロット上層, 粘性, しまり弱。
- 14 黒褐色 (10YR2/1) 埴土多量, AaC, 30-F/A微量, 粘性, しまり弱。
- 15 濃い黄褐色土 (10YR5/2) 埴土プロット多量, 埴土中量, 粘性, しまり弱。(埋戻土)
- 16 黒褐色 (10YR2/1) AaB, 埴土プロット少量, AaC中量, 粘性, しまりやや弱。
- 17 黒褐色 (10YR2/1) AaC, 埴土プロット少量, 埴土多量, 粘性, しまりやや弱。
- 18 黒褐色 (10YR3/2) AaCやや少量, 埴土プロット中量, 粘性, しまり弱。(埋戻土)
- 19 灰黄褐色 (10YR4/2) 埴土プロット多量, AaC少量, 粘性, しまりやや弱。(埋戻土)
- 20 黒褐色 (10YR2/2) 埴土プロット中量, 埴土プロットやや少量, AaC微量, 粘性, しまりやや弱。(埋戻土)
- 21 黒褐色 (10YR2/1) AaC微量, 埴土多量, 粘性, しまりやや弱。



- 22 濃い黄褐色 (10YR5/2) 埴土プロットやや多量, AaC, 埴土少量, 粘性, しまり弱。(埋戻土)
- 23 濃い黄褐色 (10YR5/2) 埴土プロット多量, 埴土少量, 粘性, しまり弱。(埋戻土)
- 24 黒褐色 (10YR2/2) 埴土プロット中量, 埴土プロットやや少量, AaC微量, 粘性, しまりやや弱。(埋戻土)
- 25 黒褐色 (10YR2/2) 埴土プロット中量, 埴土プロットやや少量, AaC微量, 粘性, しまりやや弱。(埋戻土)
- 26 灰黄褐色 (10YR4/2) 埴土プロット多量, AaC少量, 粘性, しまりやや弱。(埋戻土)
- 27 黒褐色 (10YR2/2) 埴土プロット中量, 埴土多量, 粘性, しまりやや弱。
- 28 濃い黄褐色 (10YR5/2) 埴土プロットやや多量, AaC, 埴土少量, 粘性, しまり弱。(埋戻土)

第9図 1号方形竪穴遺構



第10図 1号土坑

と同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

3号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = -74.874)。重複 1号溝より古い。規模 東西0.47 m × 南北 [0.43] m、深さ0.07 m。形状 平面形は円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

4号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = -74.872)。規模 東西0.26 m × 南北0.29 m、深さ0.14 m。形状 平面形は円形、断面形は逆台形状。覆土 As-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。

5号ピット 位置 調査区北部 (X = 42.078, Y = -74.872)。規模 東西0.36 m × 南北0.36 m、深さ0.12 m。形状 平面形は円形、断面形はU字状で中段をもつ。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

6号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = -74.875)。重複 1号高より新しい。規模 東西0.39 m × 南北0.46 m、深さ0.53 m。形状 平面形は円形、断面形は深いU字状。覆土 As-Cを多く含む暗褐色土。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。

7号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = -74.878)。重複 1号高より古い。規模 東西0.46 m × 南北 [0.18] m、深さ0.25 m。形状 平面形は不明、断面形はU字状を呈する。覆土 As-Cの純層。調査区壁面の観察ではIV層を掘り込むことから、間接的だが1号ピット等と同様に、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象が生じていると判断できる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

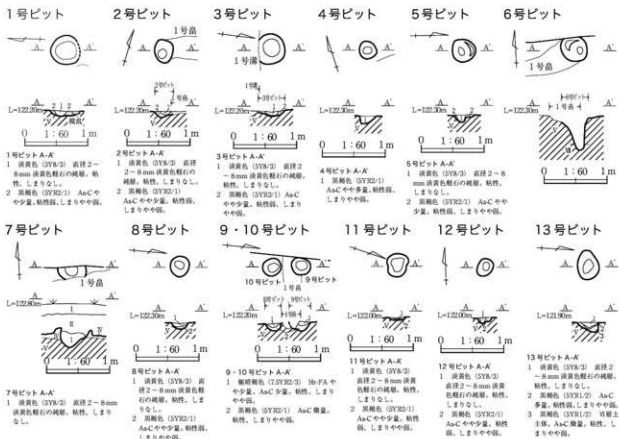
8号ピット 位置 調査区北部 (X = 42.074, Y = -74.876)。規模 東西0.33 m × 南北0.30 m、深さ0.10 m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

9号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.072, Y = -74.877)。重複 1号高より新しい。規模 東西0.26 m × 南北0.31 m、深さ0.16 m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 Hr-FAやAs-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

10号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.072, Y = -74.877)。規模 東西0.27 m × 南北0.28 m、深さ0.13 m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 Hr-FAやAs-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

11号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.063, Y = -74.873)。規模 東西0.37 m × 南北0.33 m、深さ0.04 m。形状 平面形は不整楕円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

12号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.064, Y = -74.877)。規模 東西0.23 m × 南北0.31 m、深さ



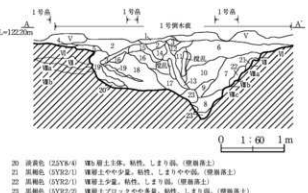
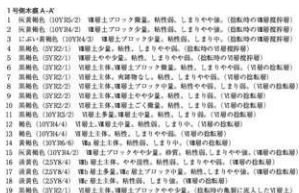
第11図 1~13号ピット

0.11 m。形状 平面形は楕円形、断面形は逆台形状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

13号ピット 位置 調査区南部 (X = 42.057, Y = -74.875)。規模 東西0.46 m × 南北0.35 m、深さ0.15 m。形状 平面形は不整形円形、断面形はV字状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

(6) 倒木痕 (第4・12図)

倒木痕はV層上面の1号畠調査時に基本層序の乱れとして観察できたが、北トレンチのVI~VII層で2箇所の平面形を確認できた。いずれもVI層上面を構築面としV層はその上位に水平堆積する。1号倒木痕を試掘し、断面の観察を行ったところ、VI~VII層に相当する捻転層が観察でき、V層の捻転は観察できなかった。捻転の方向か



第12図 1号倒木痕

ら1号倒木痕は北に、2号倒木痕は北西に倒れたと判断できる。いずれも微地形の傾斜とは逆を向くことから、その要因に火山災害や洪水は推定し難い。構築面や捻転層の状況から縄文時代前期～弥生時代に形成されたと判断できるが、2号倒木痕は1号倒木痕の裾を切って形成されているので、若干の時間差が推定できる。

(7) 遺構外出土遺物 (第13図、PL. 4)

表土層から出土した1は集緒器で、煮満した鍋を繰糸機で集緒する際、糸が塊になるのを防止して撚りをかけるための部品である。2の石鏃は南トレンチのVI層上位から、3の打製石斧はV層上面から出土した。その他、表土中から灰軸陶器皿1片や、調査地内で柱状脚部を有する高坏の脚部1片なども採集したが、細片や表面採集資料のため図示しなかった。

3号溝

【上層】



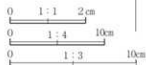
【中～下層】



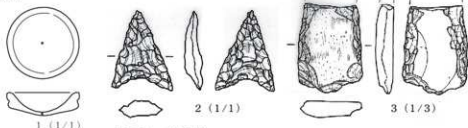
【底面直上】



1号皿



遺構外



第13図 出土遺物

第2表 出土遺物観察表

3号溝

番号	出土位置	類別・器種	口径	直径	高さ	胎土	焼成	色調	器面・底・器理の特徴	残存状況・備考
1	3号溝 上層	磁器部 蓋	-	断面径 48	[24]	灰石、石英、 白色粒	密着	外面：暗赤灰色 内面：灰白色	外面：天舟部回転ヘラズリ痕、柄み貼付。 内面：回転ヘラズリ。	天舟部1/4。
2	3号溝 上層	磁器部 高坏付片・皿 端	-	(82)	[24]	黒色粒	赤の 黄質	断面：暗灰色 器面：灰白色	断面：回転ヘラズリ、柄み貼付。底面回転糸取り痕 器面：内面：回転ヘラズリ。	底部2/3。

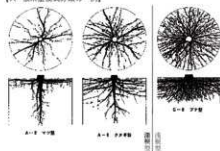
1 古墳時代前～中期の畝と樹木

畝 1号畝は畝間溝にAs-Cの混土を含む古墳時代前～中期の畝で、畝間溝間の幅は146～168cmと広い。現代のはたけでは幅広の畝は100～120cm程度で、葉物野菜のはたけ全般に用いるという。これは播種や収穫方法など栽培種の特性と耕作効率によることもあるが、農業用マルチシートやビニールトンネルなど規格化された農業資材との相互の影響も考慮する必要があるだろう。

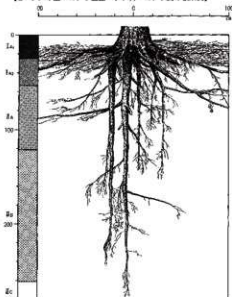
体験していない現代農法は参照に留めて遺構から考えよう。まず、本跡はAs-C混土の小溝が何条も規則的に確認できることで畝と認知できるが、これはテフラで直接覆われた畝とは比較条件に多少の差がある。すなわち14図のように、後者は火山災害の瞬間性に起因した一回性を示すのに対し、前者は耕作方法の段階に起因した一回性を示すといえる。つまり本跡の状態は耕作時の畝幅ではなく、実際には確認した畝間溝間の幅よりも若干狭い畝幅を想定する必要がある。この点を意識しつつ3表に、周辺で発掘されたHr-FA洪水以前の畝で植物珪酸体分析が行われた事例を、いくつか集めた。畝間溝間の幅は100cm以下の幅狭、120cm以上の幅広、その中間幅に大別でき、本跡は幅広に属する。計測値の振れが広いものは複数回の畝立ても考慮される。畝間溝の幅と、ある程度特定される植物珪酸体の中で栽培の可能性のある種類の検出傾向を見ると、幅狭では傾向がつかめないが、中間幅ではイネもキビ族(ヒエ属など)も検出され、幅広ではイネが優勢という結果になった。特に寺屋敷I遺跡6号畝では、少量のキビ族(ヒエ属など)に対して、イネは耕作の目安とされる数値に近く(註1)典型的である。

本跡を含め幅広のものは、先述の比較条件を加味すると、能登分類(能登1991)のa-2種からc種(註2)に相当し、c種には植物珪酸体分析から稲の陸苗代での苗床の可能性も指摘される。今回の調査で同様の分析を行わなかったことが悔やまれるが、検討結果は氏の指摘に整合的で一考を要する。仮に該期をⅢ章-2に記したような唐沢川の付け替え前夜としたとき、本遺跡に近接する中島川の開析谷には三ツ寺堤の築堤後に似た谷水田の農業景観を想定でき、本跡をそのような生産活動との関連で考えることは、的外れとも言えないだろう。ただし周知のとおり、植物珪酸体分析の対象は主にイネ科の植物であり、蔬菜類には適さない。隣接する一次調査の畝は本跡と同時期だが、畝間溝間の幅は幅狭で、耕作方向を90度変更するような抜本的な畝替えが確定でき、同じ耕作地に別種の畝が並存している。時代は下り奈良時代の史料には、穀類と蔬菜類の栽培種だけでも60以上の名称があるが(関根1969)、そもそも古文獻を引き合いに出すまでもなく、少なくとも村落の次元において生存戦略に直結する食料獲得の選択肢は多様だったのだろう。

【A・根系型模式分類の一例】



【B・クヌギ畠-コナラ畑型-ブナ科-コナラ属の根系例】

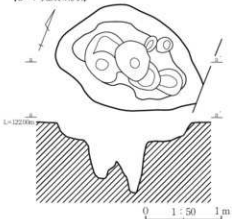


※A-Bは能登1979より引用。

【C・コナラ属の根系と想定される遺構断面の相関関係】



【D・1号土坑の形状】



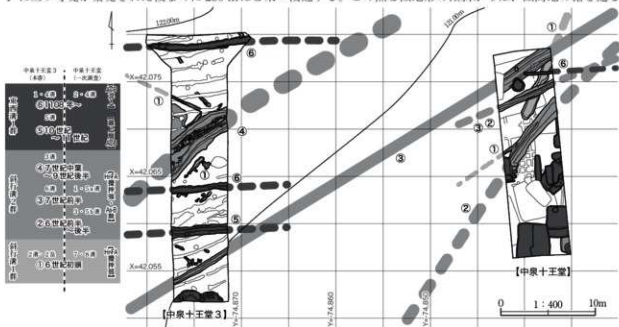
第15図 1号土坑と根系の相関関係

樹木 1号土坑は形態から樹木痕跡と判断した。覆土は1号冪と同時性を示し、耕作地の中には木が立っていたか切株があったのだろう。樹木痕跡から樹種を判断するのは難しいが、根の張り方(根系)の図鑑(苜住1979)を頼りにできるだけ考えてみる。15図に示したように、土坑状の落込みの底部からピット状の小穴が複数分岐して中央の小穴が最も深くなるのは、おそらく根株の直下に明瞭な主根が伸び、なおかつ根株周囲の浅い深度に側根や細根が密生して明瞭な根鉢を形成する根系だろうと推定した。このような根系に分類される植物にはコナラ属・クリ属・トチノキ属などがあり、参照した中でBに示したコナラの標本がよく類似する。そこで、出土木製品の樹種データベース分析を参照してみると、北関東における該期の建築部材はクスギ節やコナラ節が主体を占めるようであり(高橋2012)、植生としては整合性が確認できる。

冪の日当りを考えると本跡を切株と仮定する方が都合は良く、その場合伐採された主幹は建築部材として利用されたのかもしれないが、もはや検討の方法がない。ちなみに話をひとつ戻すと、『常陸国風土記久慈郡条』は「椎」を山の珍珠の一つとしているし(関根1969)、県内では古墳時代のトチヤコナラ属の種実も8例程度だけが確認されており(洞口2008)、「どんぐり」のような堅果類の食物利用も十分に想定できるのである。

2 古代の用水路

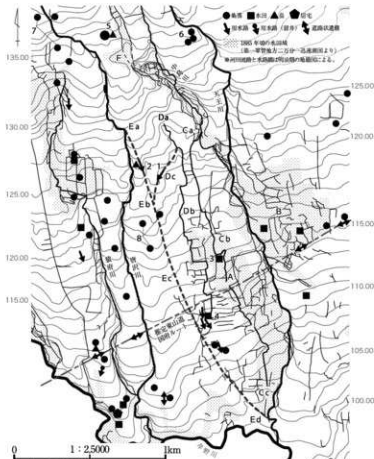
水源と流末 3号溝は7世紀中葉～9世紀後半の用水路と判断でき、調査地を北東から南西に流れる。17図には流路を想定するため、該期の遺跡分布に市街化以前の用水路網と微地形を重ねた。これを見ると、小地域の東を流れる天王川や中島川が主に灌漑するのは、より東のBである。本跡(1)の南にあるAは、中島川から分水するCと、その西の窪地から発するDの系統で灌漑される。Daは現在、3面コンクリートの用水路で、F以南の微高地にある住宅地の排水路を兼ねるが、よく見ると晴天続きで住宅地の排水路が枯れた日もDa以南は水が流れ、水路幅も広い。記録はないが地形的な条件も加味すると、Daは付近に多い扇端部湧水点の一つと判断できる。その位置関係から本跡は、Daを微地形の傾斜に平行して南西へ迂回させた用水路(Dc)と推測できる。本跡の流勢はさほど強くなかったと判断できるが、これは湧水を水源として地形に平行させたためだろう。この点、本跡はさほど有用な用水路とは考えにくい。一方、2の三ツ寺村前道下遺跡では、北西から南東へ流れる大規模な用水路(2号溝)が調査され、Ea付近で唐沢川から取水した可能性が指摘される(権田2016)。その推定E系統はEb付近で本跡と合流する位置関係にあり、本跡はこの推定E系統を補完する用水路といえる。4の福島遺跡では、As-B直下の水田と水路網が調査され、E系統はこの辺りも灌漑するが、1885年頃の水田域はFに三ツ寺堤が築堤された後なのに250mほど東へ後退する。この点と微地形の傾斜からは、微高地の裾を通る



第16図 Hr-FA降下後における溝の変遷

Ecの流路が推定できる。

溝の変遷 16図には、本遺跡と一次調査の溝の接続関係と変遷を示した。3号溝と同じ方向性の遺構は、Hr-FA直後の①の畠や溝にみえ、この火山災害が本遺跡の微地形や土地利用に何らかの制約を課したことがわかる。その後、6世紀後半～7世紀前半に、用途は推断できない溝が流れ、7世紀中葉にその脈絡の中で3号溝の用水路④が開削される。つまり本跡がこの地点に開削される背景には、少なくとも前段階での地形特性の認知という必然があったと推測できる。本跡は9世紀後半に機能を失うが、17図2の用水路もAs-Bを待たずに、数度の洪水で埋没する。推定E系統の取水源である唐沢川の上流では、17図7の保渡田東遺跡などで、7世紀後半～10世紀前半の度重なる洪水により各時期の住居跡が埋没しており、このような災害を通じて17図の推定E系統は機能を失い、これを補完した本跡も廃絶したのだろう。その



第17図 3号溝の流路想定

廃絶で水田域は後退を余儀なくされるが、その後D系統はいつの頃からか、より低所を流れるDa-Dbの系統に変遷し、17図Aの水田域を再形成したと推測できる。ちなみに本跡の廃絶後、本遺跡の溝路は東西軸へ変化するが、その面期は16図⑤の5号溝の堆積にみるようにAs-Bの降下以前で、中世以降現在まで続く地割りの萌芽は、少なくとも本遺跡周辺ではAs-Bの災害を直接の契機としないことは一考を要するだろう。

集落との関係 本遺跡の南には、西側の微高地に権原遺跡などの集落があり(17図8)、東側の低地には既述したDa-Dcと推定E系統が灌漑する水田域がある。一方、北側の高所に分布する堤上遺跡などは、Ⅲ章-2に記したようにHr-FA直後の6世紀前半から営まれる拠点的な集落で(17図5・6)、7世紀にはさらに高所に足門村古遺墳群などの群集墳をもつ。未だ分布の空白と議論の余地は多いが、これらの遺跡群を動的に分析することで、河川争奪と自然災害の狭間にできた狭隘な小地域を舞台に、およそ南北の地形傾斜に規制された垂直指向の情景を描きつづ進んだ、古代におけるある程度自律的な小地域形成の姿が見えるのかも知れない。

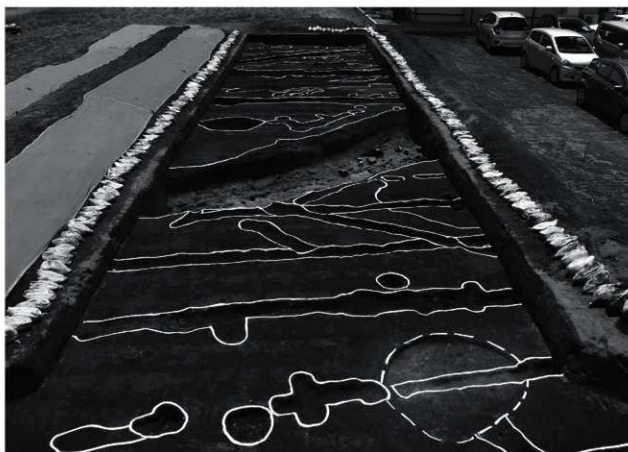
註
 1) 林山二氏は、イネの栽培種植物体(機軸部)由来)が容量1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、検出が行われた可能性が高いと判断しており(林山2000)、本遺跡ではこれでの水田調査データの信頼性が3,000個程度を目安としている場合が多い、単純に遺跡のイネ検出量は6,000個である。
 2) 「エ-2層は遺跡東縁部から発着する排水溝である(中略)、断面は平均12cmで、平均1台行い断面は数センチと考えられる。」(池堂1991 P.90 L.2-5)「(層は)中略)思井遺跡跡跡(Ⅲ)区3号溝が典型例で、およそ36m×68mの矩形溝の作付け面を並列して構成する特殊な形態の溝である。(中略)プラント・イナレル分析などによって層の層(Ⅲ)区古代であることが判明している」(同P.92 U.9-15)

引用・参考文献
 高田良 2009 『新日本考古学辞典』 藤原史学研究会
 群馬県史学委員会 2001 『群馬県史』 上 原始古代 中世・近世
 群馬県史学委員会 2002 『群馬県史』 下 近代現代
 堀川友寿 2016 『耳まめ』 『三ツツ村(原宿)遺跡』 群馬県教育委員会
 中川浩一 2000 『群書類総合』 プラント・イナレル ③ 考古学と植物 同成社
 鈴木修一 1998 『古くは武蔵における遺跡と土器利用-埼玉県児島郡の考古学的事例を中心に-』 『治水-利水地帯を考える-人は是れとどのように生きてきたか-』 第7回東北日本縄文文化研究会 1998 『古くは武蔵の文化研究』 古くは武蔵文化研究会
 早稲田 1990 『第五巻 遺跡の発掘と土器』 『群馬県史』 藤原史学研究会
 池田隆雄 2012 『13章 北国へ向く一茨城編-物6編-群馬編-山梨編-長野編』 『古の考古学 出土本物品用データベース』 海潮社
 田村孝 2018 『大田原に開いた水田-空野の調査と-鎌倉山(群馬県をめぐって)』 『考古学ジャーナル』 群馬 文化財に集まる大田原時代 36(2) ニューサイエンス社
 池田隆雄 1990 『3号1区跡の成立とその背景-5世紀初めにおける河川移動を伴う水田開拓の拡大について-』 『古代文化』 第42巻第2号 古くは武蔵文化研究会
 池田隆雄 1991 『発掘報告』 『発掘報告の文化』 5巻 2編 群馬
 山崎隆雄 2016 『耳まめと』 『古くは武蔵文化研究会』 古くは武蔵文化研究会
 文化庁文化財部国史館 2010 『発掘調査のついで』 整理-報告書編- 同成社
 藤原史学研究会 2016 『群馬県史学辞典』 研究編(2) 群馬県史学研究会
 宮川隆雄 2007 『古くは武蔵の本社会研究』 学林社

※ 表紙の部上と、目・目次で記した主要な文献以外は割愛した。



調査区全景 奥に榛名山（南東から）



調査区全景（北から）



1号溝 完掘状況（東から）



2号溝 完掘状況（南東から）



3号溝 完掘状況（北東から）



3号溝掘削前痕 完掘状況（北東から）



3号溝 土師器環 (12図9) 出土状況（北東から）



3号溝 土師器環 (12図15) 出土状況（北東から）



4号溝 完掘状況（東から）



5号溝 完掘状況（東から）



6号溝 完掘状況 (北東から)



1・2号畝 完掘状況 (北から)



1・2号畝 完掘状況 (北西から)



1号土坑 完掘状況 (北から)



1号方形整穴状遺構 土層断面 (北から)



1号方形整穴状遺構 完掘状況 (北西から)



7号ピット 土層断面 (南から)



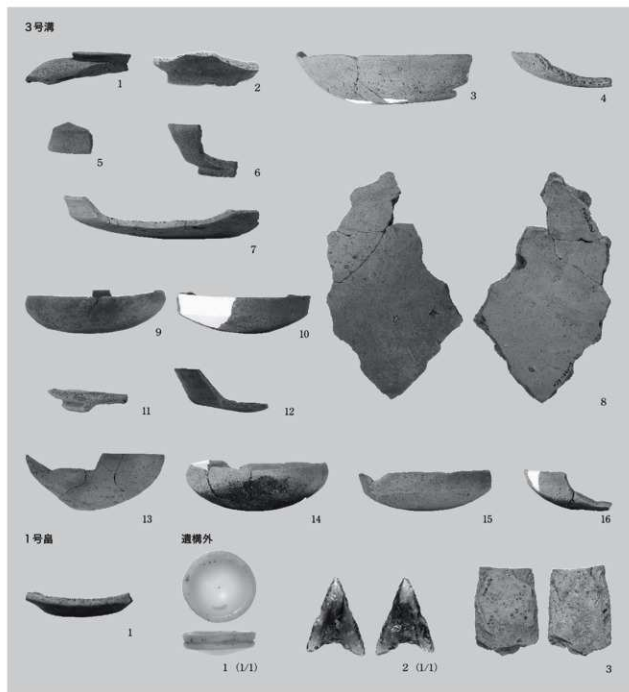
8号ピット 土層断面 (東から)



13号ピット 検出状況（東から）



発掘調査風景（北東から）



出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ナカイズミジュウオウドウイセキ
書名	中泉十王堂遺跡3
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第418集
編著者名	中村店彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	高崎市教育委員会
発行機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2018年8月30日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
中泉十王堂遺跡3	群馬県高崎市 中泉町 字十王堂99-1	102020	742	36°22' 23"	139°0' 8"	20180418 - 20180522	182.95㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中泉十王堂遺跡3	田畑	縄文時代	倒木痕 2箇所	縄文土器 打製石斧・石鏃	
		古墳時代	畠溝 2条 土坑 1基 ピット 13基	土師器	・As-C混入黒色土を畝間溝の覆土に含む広畝の畠。
		飛鳥～平安時代	溝 1条	須恵器 土師器	・3号溝は用水路と判断できる。
		平安時代	溝 1条 方形竪穴状遺構 1基	須恵器 土師器	
		中世以降	溝 2条	陶磁器 古銭	

中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年8月13日 印刷
2018年8月30日 発行

発行 高崎市教育委員会
〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
TEL 027-321-1292

編集 技研コンサル株式会社
印刷 朝日印刷工業株式会社

